

血管内に人工血管患者の負担少なく

米沢市立病院

大動脈瘤手術の認定施設に

米沢市立病院は、腹部大動脈瘤（りゅう）に対する「ステントグラフト内挿入術」の実施施設の認定を受け、本年度から同手術による治療を行っている。血管内に人工血管を挿入する手術法で、開腹手術に比べて患者への負担が少ない。置賜地域では他に認定医療機関がなく、地域住民にとって治療選択肢が広がった。

ステントグラフトは、内側にばね状の金属をめぐるせた人工血管。腹部大動脈瘤の場合、太ももの付け根を数センチ開き、カテーテルという細い管で動脈に通し、動脈瘤の位置に留置。血圧でばねが開くため自然に固定される。動脈瘤に血圧が掛からず、破裂を防ぐことができる。比較的新しい技術で、日本ステントグラフト実施基準管理委員会が開腹手術件数などの基準を定め、施設認定を出している。

同病院では、ステントグラフト内挿入術の技術認定をもつ福島県立医大の佐藤洋一臨床教授が昨年10月、心臓血管外科長として着任。

手術件数などの基準を満たし、ことし3月に施設認定を受けた。今月1日には、市内の男性（84）に対し認定後初の手術を実施。術後約1週間で男性は退院を迎えたという。

「手術時間は外科手術よりも大幅に短く、術後の回復も早い」と佐藤臨床教授。今後、胸部大動脈瘤に対するステントグラフト手術の施設認定も目指すとしている。

（山形新聞 記事抜粋）